



一発屋！
そうせい侯

hirotsugu ko

第一話

毛利敬親…

第12代藩主・毛利齊広の養子となって、天保8年（1837年）に家督を継ぎ、第13代藩主となる。天保9年（1838年）に萩に入ると、有能な家臣を採用することで、窮乏していた長州藩を豊かにさせ、幕末の雄藩の君主として明治維新を成し遂げるきっかけを作った。家臣の意見に対して異議を唱えることは少なく、常に「そうせい」と返答していたため「そうせい侯」とあだ名がついた。

この話は、そのエピソードをもとにして作られたパロディであることを、ここで触れておきたい…

天保10年（1839年）…この頃、長州藩は慢性的な財政難に陥っていたため、村田清風を登用して、質素儉約と貨幣流通の改正を行った。だが、家臣の村田清風は、それだけに留まらず、次なる改革案を提唱したのだった。

「我が藩の財政難は、未だに続いている…ゆえに、このたび、新たな改革を行ないたいと思う」

会議の席で、村田清風は、そう述べると、

「ほう…どのようなことを、されるおつもりか？」

家臣の一人である坪井九右衛門が、興味深げに尋ねてきた。

「下関に、越荷方を設置しようと思う」

「越荷方？」

「下関を通る貿易船を相手に倉庫を貸したり、彼らの資金繰りのお手伝いをしたりするものだ」

「何故、そのようなことをされるのですか？」

坪井の問いかけに、

「関門海峡は、西国の諸大名にとって商業・交通の要衝である。ほとんどの船が、ここを通過するため、彼らを支援できる施設を近くに置けば、喜んで使ってくれるであろう…それをうまく利用し、生業にすることで、税収をあげようということだ」

と、答えた。すると、同席をしていた棕梨藤太が、

「しかし、新たに倉庫を建設したり、金貸し業をしたりするとならば、莫大な資金が必要となりましょう…回収できる見込みは、お有りなのか？」

声を上げると、

「出島などで取り扱う商品は、大変貴重な品物ばかりである。停泊中に、盗人に狙われる危険性は大きいあるため、警備の行き届いた倉庫は重宝されることだろう…ゆえに、採算の見込みは、十分あるとみている」

村田は、そう淡々と返したのだった。

「だが、そのような生業…一体、誰を起用して行うつもりか？」

「こういった仕事ゆえ、我々武士では肩の荷が重たかろう…そこで、豪商の白石正一郎や中野半左衛門らに任せようと思うている」

それを聞いた棕梨は、ふいに声を荒げ、

「先の“三七カ年賦皆済仕法（1843年（天保14年）に村田清風が行なった貨幣流通の改正法。家臣団の負債を借銀1貫目につき30目を、37年間支払えば元利完済とした）”で、商人との癒着を改善し、やっと身分の上下に示しをつけたというのに、また逆戻りをさせるおつもりか？」

反論した。それに対して、村田は、

「この越荷方は、藩が運営するものだ。豪商たちは、我らの指揮下に属するため、それを経営する権利はない…癒着など、決しておこらぬ」

毅然とした態度で、言い返したのであった。

「それがし、村田どのの意見に得心致しました…下関に越荷方を設置する件、賛成でござる」

坪井は、そう言うと、そうせい侯へ視線を移したのだった。

「殿、如何いたしましょうか？」

そうせい侯、いわく…

「そう、せい！」

つづく…かも…（汗）

第二話

下関に越荷方を設置した村田清風は、長州藩の財政の改革だけではなく、藩内の教育の改革も行おうとしていた。

「第五代藩主・毛利吉元公は、人づくりこそが藩の繁栄の基本と認識され、1719年（享保四年）に、萩城の近くの堀内の三の丸に明倫館を建てられた…」

村田は、会議の始めに、そう切り出し、

「将来を考えるならば、学問を盛んにし、並行して剣術の稽古にも力を入れて、社会に役立つすぐれた人材をより多く育てることが重要であろう…そのためには、堀内にある明倫館では手狭ゆえ、移転拡充を図ろうと思うのだが…」

今日の議題を述べた。

「移転先は、もう考えられておられるのですか？」

坪井九右衛門が、尋ねると、

「江向が良いと考えている。あそこには、広大な用地が余っているから、それを使わない手はない…それに、子弟たちの通学を考えると、随分と近場になるからな…」

と、さらりと答えた。すると、

「伝統ある明倫館を、かような僻地に移すなど、先代を冒瀆する行為でござる…拙者には、到底賛成できぬ」

棕梨藤太が反論した。

「では、そなたは、教育の推進は図るべきではないと申すか？」

「そのようなことを、言っているのではございません。わざわざ、移転などせずとも、勉学や剣術など、やろうと思えば、どこでもできる！」

彼の話聞いて、村田は、

「それがしは、教育を受ける子弟の数を問題としているのだ。これからの時代は、我々のような武家でも上位に位置する者たちや殿のご親族だけではなく、下級藩士に至るまで全ての武士たちがきちんとした教育を受け、底辺を上げていかなければ、他の雄藩と対等に渡り合うことができなくなると考えているのだ。規模の狭い社会だけで、物事を考えるべきではない」

と、言い放った。

「ならば、村田どの、どのくらいの敷地が必要だと思われているのか？」

青筋を立てながら、棕梨が問うと、

「少なくとも、今よりも15倍の広さだ」

「じゅ、15倍!？」

たまらず腰を抜かした。

「新しい藩校の中には、水練をするための池や兵を訓練するための練兵所も創設しようと思っ
ているからな」

村田の壮大な意見に、棕梨はおもむろに口を開き、

「藩のすべての教育、調練を、そこで行なおうというのか」

「一つにまとめた方が、何かと都合が良いと考えている」

「むむ、確かに…」

と、納得したのだった。

「さすが、村田どのでございますな。いたく感服しましたよ。ですが、殿のご意見も伺わなければ、なりません…」

坪井は、そう言うと、そうせい侯へ視線を移したのだった。

「それがしは、とても良い案だと思いますが、如何いたしましょうか？」

すると、そうせい侯は、鼻から大きく吸い込んで、かっと思を血走らせた！

「そう、せい！」

つづく…多分…（汗）

第三話

嘉永6年（1853年）、アメリカ合衆国の提督・ペリーが来航すると長州藩は、相模国周辺の警備に当たった。その時に彼らが目にした黒船は、想像を絶するものであり、深く脳裏に焼き付いたのであった。

「メリケン国は、我が国を開国させるため、黒船に搭載された大砲で脅し、無理やり条約まで結ぼうと迫ってきた。これは、我が神国を愚弄する行為に等しい…これ以上、奴らに我が国を良いようにさせぬため、我らは攘夷を掲げるべきだ」

「その通りだ。このままでは、異国の属国にされるだけだ。我が国は、外圧などに屈してはならん！」

そのため、藩内では攘夷論が盛んとなり、長州藩は幕府に対して、その旨を意見書として提出したのだった。ところが、幕府は、安政元年（1854年）に日米和親条約を結ぶと、安政5年（1858年）には、無勅許で日米修好通商条約を締結させたのであった。これに対して、攘夷派は、異人切りや家屋の焼き討ちを行うなど狼藉を行い、不平等な条約を破棄させるようと画策を始めたのだった。このような経緯の中、文久元年（1861年）、長州藩の長井雅楽は、今は国力を高める時と考え、航海遠略策を提唱したのだった。

「無用に少数の異人を斬っても、状況は何も変わらぬ。むしろ、広く世界に通商および航海をして国力を養い、頃合いを見計らって諸外国と対抗することが肝要である。ゆえに、朝廷と幕府がしっかりと手を取り合い、公武合体のもと挙国一致で開国を行うべきである」

その意見に対して、攘夷派の周布政之助は、

「公武合体のもと挙国一致で、攘夷を行なえば良いではないか！」

と、猛反発をした。すると、長井は、

「あなたは、諸外国と我が国がどれほど、国力に差があるのか、ご存じなのか？」

聞き返した。それに対して、

「別に、相手国へ攻め込もうと言うのではない、我が国を守りきれれば良いのだ」

言い返すと、長井は、こう述べたのであった。

「しかし、彼らには黒船がある…それは、あの広大な太平洋を悠々と渡って来られるほどのものだ。まず、この点から考えると、一時的に打ち払うことはできても、その後において、何度も我が国へ襲来して来る可能性は高いであろう…」

「むむ…」

周布は、思わず言葉を詰まらせ、

「それに、あの黒船に積まれた大砲の威力は相当なものである…果たして、あれより勝るウエポンが、我が国に存在するであろうか？」

「それは…」

顔を赤くした。

と、おもむろに、そうせい侯は立ち上がった…

「そう、せい！」

その言葉に、家臣たちは一同に静まり返った。すると、

「あ、すまん…タイミングを間違えた。仕切り直しと言うことで…」

頭をポリポリかくと、家臣たちは大きくズッコケた。

「珍しく口を開いたかと思うと、この始末だ。お願いですから、話のこしを折らないでくだされ…殿！」

周布は、思い切って、そうせい侯につっこみを入れたのだった。

「ともかく、列強国とは言え、我々と同じ人間である。で、あるのなら、同じように修練をすれば、同じように経済力や技術力を持ち、彼らと対等な国力を持ち合わせることが可能であると考えている。ゆえに、今は、我慢の時だと言いたいのだ」

長井の話聞いて、彼は、

「確かに、時期早尚なのかもしれん…」

無念に思いながら納得をしたのだった。それを見た長井は、

「それでは、殿…今後は、それがしが提唱する航海遠略策で、藩を動かしてもよろしいでしょうか？」

そうせい侯、いわく…

「そう、せい！」

つづく…マジで…！？（汗）

第四話

その後、長井雅楽は失脚し、長州藩は、再び攘夷論を掲げたのであった。そして、彼らは、朝廷の公家たちに攘夷論をとうとうと説き、朝廷からの圧力で幕府は、開国の方針を翻さなければ、ならない事態に陥ったのであった。こうして、文久3年（1863年）の五月十日を期して攘夷を実行すると宣言したのであった。

それを受けた長州藩は、先駆けとして、その当日のうちに下関沖で、異国船への砲撃を行ったのであった。だが、列強諸国は、それに怯むことなく、報復攻撃をしてきたため、その激しさは増し、とうとう戦争状態に発展したのだった。この事態に、会津藩と薩摩藩は、攘夷を見直すために、長州藩を京より追い出すよう朝廷に働きかけ、彼らを政治の舞台から失脚させたのであった（八月十八日の政変）。

それに対して、反発をした長州藩は、京の都へ志士たちを潜入させ、都を焼き討ちにし、その混乱に乗じて天皇の身柄を奪おうと企んだのだった。だが、その情報は、事前に都を警備する会津藩預かりの新撰組に漏れたため、池田屋で作戦会議をしている時に踏み込まれて、ことごとく惨殺されたのであった（池田屋事件）。

それを耳にした長州藩の藩士たちは、烈火のごとく怒り、会津藩に報復を行なおうと、企んだのであった。

「会奸の所業、許すまじき。多くの我が味方を失った恨み、果たさねば気は収まらぬ。よって、京へ向けて兵を進発させ、会津藩と雌雄を決すべし！」

来島又兵衛が、そう発すると、

「そう、せい！」

そうせい侯は、吠えた…

「我が長州藩の冤罪を晴らすためにも、京へ上洛をし、会奸を下した後に、攘夷決行を直訴するべきでしょう」

久坂玄瑞が、そう申すと、

「そう、せい！」

また、吠えた…

「開国論など暴論に過ぎん…攘夷こそが、我が国を救う唯一の手立てである！」

真木和泉が、そう口にすると、

「そう、せい！」

やはり、吠えた…

「何ですか、殿…意見が出るたびに、うるさいですぞ！」

周布政之助が、そうたしなめると、近習の者が、こう答えたのだった。

「今日は、とてご機嫌なのだ。相場で儲かったらしいからのう…」

「しかし、これでは会議にならぬ。しばらくの間、少し謹んでくだされ…」

こうして、挙兵の是非を問う会議は、再開したのであった…

「先ほどより、会津の打倒をする意見ばかりが出ているが、挙兵をすれば、朝敵の汚名はまぬがれぬぞ…」

周布の意見に対して、

「周布どの、臆したか…そんなことが恐ろしくて、武士をやってられるか！」

来島が大声を上げ、

「このまま泣き寝入りをすれば、誰が攘夷を実行すると言われるのか！」

久坂が大義を唱え、

「殺された我が同志たちが報われん。あまりにも哀れだ…」

真木が泣いたのであった。

「嗚呼、このままでは、埒が明かないぞ。かくなる上は、殿に決断して頂くしかない…」

そう言うと、周布は、そうせい侯に目を向けた。

「殿…出番ですぞ。皆は、挙兵しろと言っておりますが、如何致しますか？」

そうせい侯、いわく…

「そう、せい！」

つづく…何だかなあ…（汗）

第五話

今回は、長州藩が幕府の攘夷実行宣言のもとで行った下関沖での異国船打ち払い直後の話なので、少し前後する…

列強諸国の強大さを嫌と言うほど味わい尽くした長州藩は、彼らと対抗する手段を模索していた。そこで、上海へ渡り、外国の事情に詳しい高杉晋作を呼んで、善後策を相談することにしたのだった。

「高杉どの…先の脱藩の罪は許すゆえ、我が藩が当面に抱える難題の解決に力を貸してくれないか？」

「我が藩のためであれば、喜んでお力になりましょう…」

周布政之助の問いかけに、高杉は笑顔で、そう言い放った。そして、

「奇兵隊なるものを創設したいと思います」

躊躇することなく述べた。それを聞いた周布は、

「奇兵隊？」

首をかしげた。

「近代兵器を持つ列強諸国に対抗するためには、武士だけの力では勝ち目はございませぬ。ゆえに、身分を問わず、志と力量のある者を募りたいと思います」

「なんと、民百姓から兵を募ると…」

その考えに、周布は啞然とした。

「今後において、我が藩も列強諸国に習って近代化された軍隊を導入しなければ、なりませんが、武士には、武士道があり、面子もあります。ゆえに、西洋式の調練や戦術に対して、先入観なしに適応するのは、難しいと考えます」

高杉が、そう発言すると、

「だが、実際に戦経験のないものであろう…」

「それは、この泰平の世の武士とて、さほど大差はないと思われませんが…」

「むう、確かにそうだが…」

周布は、おもむろに顎をなでた。

「しかし、元々が戦うと言う使命を持っていない者たちだ。いざ、戦争となれば、真っ先に逃げ失せることはないのか？」

その問いかけに、高杉は大きく笑うと、

「周布どの…民百姓を侮ってはいけませんよ。彼らとて、自国を守ろうとする気持ちは、我らと同じくらいあります。いや、むしろ、武士の方が名を惜しむため、無駄死にはしたくないとためらいの心が芽生えるやもしれません」

「そんなものかのう…」

周布は、天井を見て、そう呟いた。すると、

「これも松陰先生の教えなのです。草莽崛起と言う…」

「ほう…松陰先生か」

それを耳にして、思わず項垂れたのだった。

「そうだな…この難局を乗り切るためには、この日本に住むすべての者が一丸となって叡智を結集し、列強に立ち向かわなければなるまい。それこそが、本当の挙国一致と言うべきものかもしれない」

周布が、そう口にすると、高杉はニヤリと笑って、そうせい侯を見た。

「それでは、殿…最後の締めをお願いします！」

そうせい侯、いわく…

「そう、せい！」

つづく…もはや、ノーコメント… (汗)

最終話

元治元年7月19日（1864年8月20日）、禁門の変は、起こったのだった…序盤は、長州軍が会津軍を圧倒し、蛤御門まで差し迫ったのだが、京に駐留していた西郷隆盛率いる薩摩軍が、急に会津軍へ加勢をしたため、形成は逆転。その最中で、来島又兵衛は銃弾を浴びて戦死し、久坂玄瑞は公家の鷹司卿に朝廷へ参内して嘆願したいと願い出たが、振り払われたため自害、真木和泉は敗戦後、天王山にて自害したのであった。

その後、朝敵となった長州藩に対して、幕府は、前尾張藩主の徳川慶勝を総督とし、越前藩主の松平茂昭を副総督、薩摩藩士の西郷隆盛を参謀に任じて、広島へ36藩15万の兵を集結させたのだった。だが、外様大名の雄藩である長州藩を滅ぼすと、次は我が身だと危険を感じた薩摩藩は、西郷隆盛の策を取り上げ、彼らに対して禁門の変の責任者である三家老の切腹などの条件を飲んで降伏するよう説得をし、幕府に恭順する形を取らせたのであった。そのため、幕府は、苦々しく思いながらも、長州征討を終了させたのだった。

その頃、イギリスでは、幕府とフランスが良好な関係を結んでいることに頭を悩ませていた。「このままでは、我らは日本から追い出され、交易の権利をフランスに全て奪われてしまうことになる…」

そう不安を募らせたイギリスは、フランスに対抗するため、西南の雄藩を結び付けて新政権を誕生させ、自らはその支援者として最有力交易国になろうと企んだのであった。

無論、こうしたイギリスの動きとは別に、違う意図で行動をする志士が、国内にいたのであった。土佐藩出身の坂本竜馬である…

「幕府と対抗するために薩摩と長州を結び付けて、彼らの独壇場にならないようにし、日本を一つにまとめて、欧米と同じように近代化された議会政治を行うシステムを作る…これこそが、今の日本を救う道ぜよ」

彼は、そう信じて、薩長同盟の構想を思い描き、長州藩に提案をしてきたのだった。

「今、土佐の坂本くんより、将来的に考えると、薩摩と手を結ぶことが望ましいと持ちかけられている。彼は、我が藩がその話に乗ってくれるのなら、その手助けを惜しまないと言っておりますが、如何致しましょう。殿…」

長州家老の桂小五郎が、そう話すと、

「…」

そうせい侯は、沈黙に徹したのだった。

「どうされましたか、殿…」

「このたわけが。議論の途中で、わしに振るとは何事だ。わしの役目は、最後の是非を問う時の決断だと言っておるだろうが！！！」

「も、申し訳ありません…」

そうせい侯の一喝に、家臣一同は静まり返った。

「…では、皆の者。気を取り直して、議論を続けるとしよう…」

桂は、そう言って、会議の再開を促したのだった。

「確かに、いつまた幕府が、我が藩を潰そうと兵を向けてくるかもしれません。薩摩と手を結ぶことができれば、我らにとって有益でしょう。しかし、藩内で薩摩を恨む者は後を絶たず、下駄に「薩賊会奸」と書いて踏み歩いている状態です。そんなにうまくは、いきすまい…」

同じく家老の広沢真臣が、そう切り出すと、

「そんなことを言っていたら、元も子もありますまい。かような小義を捨て、大義を取るべきです。それに、下々の不満を解消させることは、我らの義務であろうと思われませんが…」

桂は、そう返した。

「薩摩をそこまで信用されるのか…」

「彼らも我らと同じ外様…不条理な幕府の仕打ちに怯えるよりは、自らが天下人となる道を選ばれるかと思われます。そのためには、外様同士で手を組まなければ、到底実現しないゆえ、利害は一致します。無論、今までの経緯があるため、誠意を見せてもらうべきでしょう…その仔細については、坂本くんと話をしようと考えております」

その桂の意見に、周囲の者は納得したのだった。

「殿…今回は最終回ですので、びしっと決めちゃってください」

「うむ…」

そうせい侯、いわく…

「そう・・・ゴホン、ゴホン、ゲホ…」

「どうされましたか？」

たまらず、桂が、そう聞き返すと、

「痰が詰まった…TAKE2を頼む…」

家臣は一斉にズッコケた。

「それでは、お願いします。サン、ニー、イチ…キュー！」

「そう、せい！」

(完)

ある日のこと…

長州藩の城内では、花見へ行くか行かないかで家臣の間で論争となり、その挙句に「お花見に物申す！こんなお花見は嫌だ…」をテーマとして話がそれていったのだった…

「とりあえず小休止と言うことか…よかろう」

桂小五郎が、話題を脱線させようと提案する高杉晋作に相槌を打つと、

「僕としては、この議題には余興も必要と思ったまで…賛同して頂き、かたじけない」

彼は、そう言って頭を下げ、

「では、早速始めましょう。折角の花見も、こんな状態では台無し…さあ、それはどんな花見かと言うと…」

と、切り出したのだった。そして、

「既に桜が散っている」

晋作が口にすると、

「時既に遅しですな…」

小五郎は、さらりと返した。すると、

「まだ、桜が咲いていない」

「えらいせつかちな話ですな…」

次のケースの話に、彼はさらに言葉を添えたのだった。だが、

「対象の花が桜でない」

晋作が続けると、

「まあ、それはそれで面白いかもしれませんね…」

小五郎は、小さく笑いながら答えた。そして、二人のボケとツッコミは、さらにエスカレートしていった…

「1日に10か所以上の花見のスポットを巡る」

「もっと落ち着いて花見を楽しみましょうよ」

二人は、そう続け、

「幼稚園児の描いた桜の絵を鑑賞する」

「何だ、それは…文化祭か何かですかね…」

家臣たちが大笑いをする中、

「自分で何枚も描いた桜の絵を鑑賞する」

「そこまでして桜を見たいか！」

延々と、

「桜の花を何枚も写真に取って、家で鑑賞する」

「写真を取りに行った時に鑑賞したらどうなんですか！！！」

やり合ったのだった。すると、

「わはは…バカバカしいのう。こうなったら、この勢いで花見に行ってくるかって言う気分にな
ってきたわい」

それを見ていた久坂玄端が、笑いながら発したのであった。それを耳にした晋作は、
「家臣たちは、花見へ行く意見に傾きつつあります…殿、ご決断を！」

迷うことなく、毛利敬親にふったのだった。こうして、
「やはり、最後はわしの出番か…」

そうせい侯は、にんまりと笑って大きく発したのだった。

「そう、せい！」

結局、最後はこうなる…！？

THE END…